

UNICORN English Communication 1

Grove English Communication I

東京大学教授 高橋和久 × 埼玉医科大学名誉教授 川端一男 [聞き手] 文英堂編集部

◎教科書編集に際して心がけたこと

—本日は新しい教科書「コミュニケーション英語Ⅰ」の2シリーズそれぞれの中心著者である高橋和久先生、川端一男先生にお話しただきたいと思います。川端先生は長く教科書のお仕事をやっていらっしゃいます。以前はもう少しやさしい教科書をご担当でしたが、今回Grove English Communication I(以下グローブI)を作っていたかがでしたか。

川端:携わる教科書の難易度の違いや新しい指導要領の規定の変化もあって、使える言語材料も分量も増えました。そのため、言いたいことが伝えやすくなったということはありませんが、単にそういう条件的なことだけでなく、内容的により深い教科書を作ることができたのではないかという自負はあります。

—高橋先生は初めての教科書UNICORN English Communication 1(以下ユニコン1)をお作りになつていかがでしたか。

高橋:教科書的正義というものを痛感しました。学生には世の中の正義を鵜呑みにしちゃいかんと言っているのに心理的な葛藤はありましたね(笑)。様々な制約の中でどれだけ不正義を行使できるか考えましたが、ちょっとはみ出ようとすると編集から叩かれました。

—真剣に意見を戦わせながらお作りになったということ、高橋先生流におっしゃったものと解釈しておきます(笑)。ところで、コミュニケーションな英語とか、コミュニケーションとしての英語ということが言われます。今回教科書を作られるに当たって、この面でお考えになったことはあるでしょうか。

高橋:そうですね。傲慢な言い方もかもしれませんが、多少意識していたのは、表現のための表現、つまり



英語にはこんな便利な表現があります、覚えましょうね、というのはつまらないということですね。当たり前のことですが、コミュニケーションは伝えることがあって成り立つわけです。言語にはツールという面があって、ちゃんと機能しなければいけないということは大前提としてあるけれども、ツールとして磨いて自慢するだけでは意味がないわけで、それによって何をするかの方がよほど大事です。英語「を」学ぶことは事実なんですけど、英語「で」何かを伝えるという活動を通して、結果として英語「を」学ぶようになればいいなと思いました。

私自身の高校時代を思い出すと、英語「で」伝える中身がない、つまらない教科書だったという記憶があって、そういうのは嫌だになっていうのはありましたね。英語で何かを読んだら、知らなかったことが書いてあったり、気づいてなかった視点に気づかされたとか、些細なことでもいいのですが、分かりきったことなのに、英語で書いてあるというだけで何か別な

価値があるかのように押しつけるというのは、生徒を馬鹿にしている気がするんです。

川端：高橋先生がおっしゃったように中味があるということが何より重要です。私の場合は高校時代の教科書が面白かったので、今でも中身を覚えています。先生のご指導が巧みだったのだらうと思いますが、英語で新しいことが書いてあるのを発見するのが嬉しくて、教科書でも入試問題でもどんどん読んでいるうちにいつの間にか英語も好きになったという経験がありました。

グローブIを使う生徒の中には、英語がさほど得意でない人もいますが、英語を使ってコミュニケーションしたいと願う気持ちは、むしろ強いかもしれません。そういう生徒の気持ちに訴え、英語の学習を通じて何かをつかんでくれるような教科書を作りたいといつも考えています。英語がやさしいからといって中味をやさしくする必要はないので、その兼ね合いが大事です。

●語彙に関連して

——教科書の場合、誰かの書いたものを入れるにしろ、自分たちで書き下ろすにしろ、語彙に対する配慮が必要になってきます。語彙数もそうですし、どんな語彙を入れるかということも問題になります。

高橋：グローブIを拝見したんですが、辞書の引き方のページがありますね。その中に「難しい単語は辞書で引くとむしろ簡単だ」という指摘があります。これはとても重要な指摘です。基本的な語は概して応用範囲が広く、そのためしっかり習得することが案外に難しく、難しい単語はさほどではない場合が多いということは、指導上学習上意識しておいていいことです。

効率よくツールとしての英語を学ぶという視点からすれば、応用範囲が広い単語の習得が重要だということになるでしょうし、他方で生徒が読んで面白く、印象深い内容であるためには、むしろ多義的でない、使用頻度の低い単語をうまく残すことも必要です。そうした単語が出ることで自体が過度の負担に直結する

わけではないと思います。

川端：「英語表現」の教科書では、単語の使用範囲や頻度をより強く意識しましたが、「コミュニケーション英語」ではリーディングの要素も大きいですから、イメージを膨らませたり、表現を多様にするために、新しい単語はある程度出してもいいのではないかと感じます。その意味では是非習得してほしい語彙の精選と出現順には特に留意いたしました。

——「コミュニケーション英語Ⅰ」の教科書では、これまで定められていた新出語彙の上限が撤廃され、400語を下限とすることが示されました。

川端：それでも最初の方では新語数を減らすために悩むことが結構あったのですが、「コミュニケーション英語Ⅱ」の終盤では、新語が足りなくなるかもしれないと編集の方に言われて、新語の選択を見直すこともありました。今までの教科書編集ではない、新しい経験でしたね(笑)。

——ちなみに、思い入れの強い単語というのはありますか。絶対削りたくなかったという。

川端：私は grove という単語ですね。教科書の書名でもあるこの語は、生徒がともに学び合う英語の森というイメージで、本当はⅠに入れたかったのですが、結局入らなくて、Ⅱに入れることができて、ほっとしました。

——えっ、入っていましたっけ…。ひょっとすると、先生の思いに気づかず、最後の段階で削ってしまったかも…。あっ、ありました！ FOR READING 2 でしたね。一瞬冷や汗が…。ついでに言うと、unicorn という語はユニコン1の村上春樹さんの課 (LESSON 8) で出ていましたね。

●お気に入りの課

——特に思い入れのある課、お気に入りの課はありますか。

高橋：そうですね、お気に入りはいくつもあります。それとは逆みたいな話になってしまうのですが、いくつか自然科学系の題材がありますね。例えば LESSON 7 で「眠りの科学」を扱いました。私はふだん何の疑問も抱かずに眠ってしまう方なので、自然

科学系はあまり向いていないんだなということを改めて確認しました。色の課やバオバブ、エル・システムの課(LESSONS 3, 4, 6)は、作っていて特に面白かったですね。

題材で思い出しましたが、LESSON 2の図書館猫デューイの話で、フルネームを出せなかったのが、ちょっと悔いが残っています。Deweyという名前は、図書館学者のMelvil Deweyにちなんでいるだけでなく、フルネームのDewey Read MorebooksはDo we read more books?に引っかけているんですね。

——LESSON 2はまだ英文が短いですからね。残念でした。ユニコン1のLESSON 1とLESSON 10は高橋先生の書き下ろしですが、これらに関してはどうですか。見本本をお読みになった高校の先生方からは、LESSON 1はやさしいように見えても奥が深い、という感想をいただいています。

高橋: そうですね。LESSON 1は元気が出るように書きました。時間を無駄にしないで一生懸命生きようね、という素直な話です。

——素直に読み取って元気になっても、深く考えて悩んでもらってもよいということですね。

高橋: LESSON 10のパート4はちょっと屈折していますが、私に書かせたらそういう人間性が出てしまうので、自分が生きている座標軸がすべてだと思わないで、常に不足や欠如があると思ってほしいという思いで書きました。言葉というものが自分の感情を過不足なく表すことができるわけではないとか、相手の言っていることが分かったと思っても誤解かもしれない、他の見方があることをいかに説教調じゃなく言えるかを考えました。いや、そんなかつこいいこと考えたわけじゃないかもしれませんが(笑)。高校生だけじゃなくて、自分の視点がすべてだと人間は思いがちなので。

——それから、高橋先生のご専門の文学を扱った課もあります。一時期、高校生が読む英語からほとんど文学が消えてしまいましたが、最近では入試も含め少し復活してきています。他方、文学部はどんどん消えている

という状況ですね。高橋先生は日本英文学会の会長や東大の文学部長などを歴任されていますが、現代において、というのが大げさなら、高校や大学教育における文学の価値をどうお考えですか。

高橋: 文学の価値をダイレクトに言うつもりはありませんが、言葉は大事だということが文学においては鋭角的にクリアに表れるのではないかと思います。AはBだと書かれていても、読み手によって解釈が違ってくることが、文学ではよくあります。自分なりに理解しようとし、その結果分かったような気がすることもあるが、実はそれがすべてではない、という認識が重要です。文学ではしばしば意識して言葉に多義性が与えられているため、解釈に幅があることを、読者は知っているはずで、ところが、現実世界のコミュニケーションにおける多義性は、文学ほどクリアでないので、意識されにくいことがある。ただ、実際には当たり前存在しているのです。言葉は言葉だけで自立しているのではなく、コンテキストによって規定されています。したがって、コンテキストを共有していなければ、同じ言葉もまったく意味が変わってきます。そんなことが文学を読むことによって分かってくると、世界の見方も少し違ってくるかもしれません。

——FOR READING 2はドリス・レスリングの短編小説ですが、どうしてこの話を置かれたのでしょうか。

高橋: この話は、語り手を男だとするか、女だとするかによっても、解釈が変わってきます。コンテキストが変わると意味が変わるということですね。一義的には小さな女の子がちょっと背伸びをしたという話ですが、それだけでは落ち着かない何かがあると思います。そこが面白く、考えさせるところです。見えているものがすべてでなく、常に不足があるということですね。言葉の意味作用は必然的にそういうところを持っているということです。

——川端先生、グローブ1でお気に入りの課はありますか。

川端: 目次を見ているとそれぞれの課を議論した折々の季節感などが甦ってきて、それぞれに思い出がありますね。最初に書いたのはLESSON 3の弁当でした。実のところは編集会議で出していただいたいろ

いろいろな弁当が発端だったかもしれませんが、最初に取り上げたわりには結構時間がかかって苦労した題材です。生徒にとって極めて日常的なことを国際的な視野に置いてみようということです。新聞で紹介されたそうで、そういう視点にご理解をいただいたと嬉しく思います。

——新聞では、教育基本法の観点から日本的なものを紹介するということが必要となったので、という視点で扱う向きもあったようです。

川端：そういう視点はもちろんですが、少なくとも生徒は自ら言うべきことがいろいろあって盛り上がるだろうと思います。LESSON 1は最初に書いたのではないのですが、編集過程でいろいろな紆余曲折があったこともあって、印象深い課です。口笛だけでも相手がいればコミュニケーションが成り立つことから始めて、コミュニケーションの方法といえば、携帯やメール一辺倒の現代の高校生に、よいコミュニケーションのあり方について考えるきっかけになり、教室での活動が盛り上がることを期待しています。

高橋：LESSON 1のトルコのコミュニケーションって知らない生徒が多いですね。「えっ」という。

川端：そうですね。「へー」でいいんですよ。

——グローバルシリーズは「共生」が1つのテーマです。

川端：多くの課が「共生」というテーマに当てはまると思います。例えば LESSON 4 のゾウガメのムゼイとカバの仔オウエンの友情の話はそうですね。これは動物の実話として読んでもよいし、また寓話として異文化あるいは世代間の交流のテーマを読み取ってもよい。共生の感覚はコミュニケーションの土台となるものですが、生徒が他にもいろいろな切り口を発見してくれるかもしれません。ユニコン1のコンセプトでも筆頭にありますが、2つの教科書はこの点で共通の基盤に立っていると考えてよいでしょうか。

高橋：カメとカバの話はいいですね。高校生はこの課で恋愛の術を学ぶでしょうね。

——実はカバが別のカメを好きになったという、教科書には載らなかった後日談がありまして…

高橋：さらにいいじゃないですか(笑)! コミュニケー

ションの根本ですよ、コミュニケーションの裏にはディスコミュニケーションがあるといういい例です。

◎イングリッシューズ

川端：教科書の英語を書いていると、オーセンティックな英語というものにジレンマを感じることはありませんね。これでいいのかな、といつも思います。

高橋：オーセンティックな英語と私も言いますが、それは何かという問題がありますよね。アングロサクソンの英語とインドのものすごく大勢の人が使っている英語には大きな違いがあります。いろいろな英語、イングリッシューズがあるんだよ、と言っておきながら、発音記号1つにしても現実には一部の人にしか使われていないものが発音記号になっています。世界英語としての議論は、教科書に使っている英語を相対的に見る、ということを書いた英語を載せておく必要があるんじゃないかな。

川端：そうですね。特に英語表現ではイングリッシューズを考える必要があるんじゃないかな、教育がまず一定の規範を示すべきものとすれば、なかなかそうはいきませんね。

——知識としてそういうことを教えるということは現行版の教科書でもやっていますが、いろいろな工夫をすれば英語の実態をある程度体験することはできると思います。そこはやりたいですね。



高橋和久先生

◎英語教育と日本語教育

高橋:勝手なことを言えば、どこかで言葉の壁を意識してほしいんですね。生徒は日本語だと自分の思考や感情を過不足なく言えるんだけど、って思いこんでいるようですね。だから英語で言葉の壁を感じることで、母語である日本語も含め、言葉で自分の思考や感情を過不足なく表現するのって難しいものだと、ということを直感的に思ってもらえるといいなあ、言葉に対して謙虚になってほしいと、そんなことをちょっと思いました。

——英語に関して、Aという言い方とBという言い方のどちらがより一般的なのか、とても気にする人がいますね。それが明らかな場合ももちろんありますが、どちらでもよい場合も多いわけですね。自分が使っている日本語のことを考えればすぐ分かると思うのですが、なかなかそうはならないのですよね。1つには、英語に対する姿勢が頭でっかちになり過ぎてしまっていて、生きた言語としての感覚を欠いているからかもしれません。現場においては、言葉は非常にフレキシブルなものだと思うのですが。

他方で別の問題として、日本語に対する姿勢自体に、そもそも問題があったのかもしれないという気もします。日本語でのコミュニケーションがあまりにも当たり前すぎて、思考の対象とする姿勢が不十分であり、言語として、コミュニケーションの道具としての切り口による

教育が不足していたのかもしれませんが、今は改善されてきたようですが、日本語教育にそういう視点が不足していたので、英語を学ぶことによって初めて言語によるコミュニケーションというものを学ぶ、という面もあったと思います。

高橋:そうですね、私も中学で I / my / me / mine を習って初めて主語や目的語を意識したような気がします。日本語教育にコミュニケーションの観点が変わって改善されてきたのではないかという話の一方では、数年前から学生の書く日本語の意味がよく分からないという声があります。例えば、昔は固定電話ですから、きちんと説明しないと待ち合わせをできなかったんですよ。今では携帯があるから、いい加減に伝えても、何とか会えてしまいます。こういうことも、きちんと相手に説明することができにくくなっている一因かもしれません。そして自分の言っている、あるいは書いている日本語が相手に通じないということが分からない。通じないのは相手が悪いとすぐ思うんですね。

昔、恩師が言っていたのですが、訳読という授業は英語教育ではなく日本語教育をやっているんだと、確かに、英語教育に日本語教育の欠けていたところを担わせていたという意味があったと思います。それはよくないという批判は当然ですし、そのような役割は不要になってきたことも確かでしょう。

川端:そうですね、英学の時代から外国文化の理解と吸収という目的で独自に続けられてきた訳読法は、コミュニケーション重視の観点からは既に役目を終えています。以前、高校の教員をやっていた頃に、一部の大学が英語だけの入学試験をして、国語の試験を兼ねていると謳っていたことを思い出します。単なる入試事情もあったのですが、背景には国語教育と英語教育の評価基準が混在している面があったのかもしれない。大学入試が英語教育に影響を与えることも否定できませんが、逆に入試問題が英語教育の実勢を反映するようになるべきだと思いますし、現実、その方向に進んでいると思います。



川端一男先生

●英語で授業

—そういう時代背景の中で、新指導要領では「英語で授業」をしろと言っており、「オールイングリッシュ」が合い言葉のようにつづやかれています。

川端：「英語で授業」には誤解が多くあったようです。これは「オールイングリッシュ」のことで、授業中まったく日本語を使わないことが求められているとお考えになった先生方もおられたようです。新しい教科書には日本語が出てこないのだろうと考えておられたようです。しかし、文部科学省の説明会でも、生徒に英語をなるべく多く発信させることが主眼だと言われていたと思います。これは多くの熱心な先生方が従来から普通に行ってきたことです。

教科書との関連で言えば、コミュニケーションな活動がしやすい場所は用意してありますが、それよりはむしろ、正課の本文に絡めて、生徒の自然で活発な言語活動を促すことができればいいですね。正課で日常的にそういう活動ができないと、「英語で授業」とは言えないのではないのでしょうか。

—「オールイングリッシュ」を徹底すれば、文法の説明も英語でやることになるのでしょうか。

高橋：文法によるくりを重視する中で、文法を英語だけで説明することにこだわり過ぎると、無理が生じるおそれがありますね。文法というのは抽象度の高いもので、多くの具体的な現象から導き出されたものです。ですから、具体的な事例に接する経験が乏しく、不十分な知識しかない段階で、未知の文法事項を抽象的な英語による説明で理解させようとするのは、少なくとも効率がよくないですね。

例えば、仮定法は実際のコミュニケーションの中で頻繁に出てきますが、そこからほとんど切り離れた形で“Subjunctive”と言った途端に難しくなる。だから、あくまでオールイングリッシュに徹するならば、文法で逐一説明しようとするのではなく、マテリアルを重視し、コロケーションベースで進める、というような方法を考える必要があるでしょうね。

ただ、現在の日本の学校教育で英語にかけている時間を考えると、日本語による文法説明で知識を整

理して、骨格を作ってベースにするという方法が、一概によくはないとは言えないと思います。

川端：指導要領では、コミュニケーションと言う一方で、「コミュニケーション英語I」で文法事項をすべて扱うこととなっています。実際には文法がないと効率が悪いというのは承知の上ですが、問題はその扱い方でしょう。

—文法事項を英語で教えたいという先生もいらっやいますが、そのためには授業の3分の2を文法説明と練習に当てる必要があるという声もありました。

川端：それだと新しいものを読んだり、聞いたりして、ハッとするという機会が得られにくくなるおそれがないでしょうか。それでは、本末転倒になってしまいますから、そうならないよう生徒の実態に応じた工夫をしていただきたいところです。

●おわりに

—最後におふたりの先生から、ご採用を検討される高校の先生方、生徒さんたちに一言お願いします。

川端：グローブIは、シンプルな構造で分かりやすく見えるけれど、ステップを積み重ねながら文法事項を含めてスパイラルに、繰り返しながら学習できるように工夫しています。そしてコアの部分と発展の部分をうまく使い分けていただければ、幅広い生徒の実態に合わせながらご指導いただけると思います。IIでもIでの既習事項をベースにしながら、新規事項と組み合わせ、関連付けて学習できるようにしています。

高橋：私はもうしゃべりすぎたのであまりないのですが、ただ、ユニコン1の「共生・探究・跳躍」というコンセプトは、「共生」で横に広がり、「探究」で下への深まり、「跳躍」で上にびよんと伸びる、いいですね。—「コミュニケーション英語III」では、さらに跳躍していただきたいと思います。本日はありがとうございました。